

レッジョ・エミリアの幼児教育における身体表現性

高野 牧子

キーワード：レッジョ・エミリア、身体表現、身体意識

要 旨

レッジョ・エミリア教育では、子ども一人一人を尊重し、創造的な体験によって子どもたちの個性を引き出すプロジェクト活動がよく知られている。園の中にアトリエリスタが在中する美術教育がクローズアップされ、評価が高い。一方、身体表現についての報告は少ないのが現状である。そこで、身体表現活動についてはどのように展開されているのか、明らかにすることを研究目的とする。研究方法は2015年、2016年の2度にわたり、レッジョ・エミリア市を訪問し、現地にある4つの乳幼児施設の環境構成や活動内容について視察し、園長、および保育者へのインタビュー調査を実施した。その結果、多くの事例で芸術教育の一環として、美術、音楽と芸術領域で分けず、多様な芸術表現を支える身体表現性が認められた。子どもの身体意識を高める活動は広く行われ、保育者たちは動きで子どもとコミュニケーションし、子どもたちの身体表現を促していた。また、プロジェクトで光や影を映した環境を構成し、場と身体が対話できる空間は一人一人の身体表現を促す機会になっていた。つまり、保育者は感性を刺激するような環境を構成し、その環境に対し、子どもたちは身体で関わり、五感で感じ、事物と共に動くことで理解を深めていると結論づける。

1. 研究目的

レッジョ・エミリア市はイタリア北部に位置し、第二次世界大戦中はレジスタンス活動が活発だった地である。第二次大戦直後、街に残された戦車を売り、復興を計画する際、女性たちの「子どもの教育・保育に力を注ごう」という声から、イタリアで初めて幼児学校が建てられ、その後、イタリア女性組合が8園を自主運営した。

こうして始まったレッジョ・エミリアでの幼児教育は、ローリス・マラグッツィがその教育体制を作り上げ、1991年ニューズウィークに「世界で最も優れた10の学

校」の1つとして紹介されたことで、世界的に有名になった。

近年、レッジョ・エミリア教育における身体性について、佐藤(2011)は次のように述べている。

「動きのなかでの身体的な集中、多感覚的知覚と感性、細部と物語的な想像に向ける注意、といったものです。(子どもたちは、走り、ジャンプし、触れ、鳴らし、においをかぎ、物語的状况を考え出します。)」

(佐藤 2011 : 14)

「子どもたちは身体を動かすことと考

ることを分けてはいません。子どもたちは身体とともに学ぶのであり、このことはあらゆるときに起こっていることです。」(佐藤 2011 : 274)

また、「Theater Curtain」という、市のオペラハウスの緞帳をデザインしたプロジェクトでは、子どもたちが劇場内を動き、走り、デザインを考えている過程が紹介されている (Vea2002)。

さらに、廃材を集積し、芸術教育の素材として提供するレミダ (REMIDA) の展覧会として、市内各所で多様な芸術を展示した「REMIDA Day」(2005)でも、ダンスを踊っている写真が掲載されている。

その他、Giulio Ceppi、Michele Zini (1998 : 94) は、「音の知覚は複雑で多次元的身体的経験である」と述べ、子どもがたたたくドラムに合わせ、子どもたちが動いている写真が掲載されている。

子どもの五感や身体の動きで探索し、学ぶという、このような探究的身体はどのように育まれているのか、具体的な保育内容の中でどのように生かされているのか、実践的な報告は少ない。

そこで、本研究では、探索的身体を育むために、身体表現活動はどのように展開されているのか、明らかにすることを研究目的とする。

2. 研究方法

Loris Malaguzzi International Centre (以下、マラグッツィ・センターとする)、REMIDA(ボローニャとミラノの2カ所)、レミダデーにおける国際写真展、Reggio Narra、子どもたちのアイディアや夢を住宅の設計に活かしたコリアンドリーネ

など多くの施設や展覧会等を視察し、そこでの身体表現の状況を参考資料とした。また、レッジョ・エミリア市内には多様な幼児教育施設がある。レッジョ・エミリア教育を実践している幼児学校の他、企業やNPOによる運営施設や、教会系の幼児学校など、運営方式や教育アプローチが違う幼児学校があり、4つの幼児教育施設を見学し、保育者へインタビューした。

<調査期間>

第1回視察調査 (視察場所①～④)

2015年5月14日～5月20日

第2回視察調査 (視察場所②～④)

2016年5月12日～5月19日

<協力施設>

①Scuola Don Milani

公立幼児教育施設見学、5歳児クラスとの交流

②Scuola dell'infanzia Giulia Maramotti

私立乳幼児施設見学及びインタビュー

③Scuola dell'infanzia Elisa Lari

教会系幼児教育施設見学、5歳児クラスと交流

④ Scuola dell'infanzia Centro Rosa Galeotti

認可幼児学校見学及びインタビュー

3. 結果および考察

(1) レッジョ・エミリアの多様な施設での身体表現

アトリエリスタは大学で芸術を専攻した教師であり、他の教師と子どもの創造的活動を支援する役割を負っており、レッジョ・エミリア教育の大きな特徴である。アトリエリスタは美術を専門とする教師

のイメージが強い。しかし、マラグツィセンターでは、ダンサーがアトリエリスタとしていたこともあったという。アトリエリスタの専門性を活かし、子どもたちの表現性を引き出していると考えられる。「紙」のアトリエの映像展示では幼い子どもたちが長い紙を振って動いている映像が展示され(写真 1)、ボローニャ・レミダでは廃材からダンスをイメージした子どもの作品が絵葉書になっていた(写真 2)。国際写真展での子どもたちによる展示では、身体部位やダンスの瞬間を捉えた写真が多く出品されていた。

多くの作品展示の中に身体表現性が認められ、美術、音楽、ダンスと芸術領域を分けるのではなく、表現手段として多様な芸術領域が一体となっていると考えられる。



写真 1 紙の映像展示



写真 2 ダンスの絵

(2) 幼児教育施設

① Scuola Don Milani

ドン・ミラーニ幼児学校

在園児は 3,4,5 歳、75 名で、集合住宅街の中庭、緑に囲まれた環境の中にあった。コンクリートの建物は数年前にリニューアルしたそうである。公立幼稚園のため、移民の子どもの受入れが多い。国からの補助金もあるが、十分ではないと園長は語り、子どもの作品を販売していた。この園ではアトリエリスタはプロジェクトの際に来園し、常駐してはいない。ピアッツァには、ままごとコーナーやライトテーブルのコーナー、靴、洋服、帽子などがある鏡のついた変身コーナー(写真 3)、レミダから出たプラスチックの筒などが多くある素材コーナー(写真 4)などがあった。自由保育の時間には、5 歳児が部屋から出てくると、3 人の女兒は変身コーナーで衣装を選び、4 人の男児は素材コーナーでどんどん並べて遊び始めた。



写真 3 変身コーナー

3 歳児クラスでは、保護者向け発表会でのダンスの練習中で、担任と音楽の先生が指導していた。室内から屋外へ続くテラスで実施していた。動きは円になり、歌に合わせて歩きながら円周状を周り、止まって動物に変身するもので、動物によって耳を

ぱたぱたしてジャンプしたり、お尻を振ったりする動作などを繰り返していた。発表会の練習とはいえ、見栄え良く踊らせる特訓ではなく、曲をかけて動きを思い出せるようにしながら楽しく踊っていた(写真 5)。

5 歳児クラスでは、「伝える」ことをテーマにクラスの活動を進めていた。水習字で日本の文字を書くなどして楽しんだ後、日本文化として阿波踊りを紹介した。プレゼントした紙人形は興味関心が高く、取り囲み、良く見て日本の民俗舞踊のイメージを膨らませていた(写真 6)。



写真 4 プラスティックの素材



写真 5 3 歳児のダンス

②Scuola dell'infanzia Giulia Maramotti

ジュリア・マラモッティー幼児学校

ジュリア・マラモッティー幼児学校は、2008 年洋服メーカーの MaxMara 社を運営するマラモッティ財団が設立した園で、半官半民の運営施設である。社員の子どもが 30%、一般市民の子どもが 70% 通い、ペタゴジスタ^{注 1}と保育士たちによる保育を実践している。0 歳児から 3 歳児の乳幼児を対象とした施設であり、9 月～6 月に開園し、7 月は別リクエストに応じている。月曜～金曜 7:30～16:00 保育を行い、延長保育は 18:00 までである。

デザインコンテストで選ばれた建築家による建物は、基準の 2 倍の広さを有し、美しさと透明性をコンセプトにしている。エントランスの透明パネルは地域が借景となり、子どもの足の大きな写真と共に、建築のコンセプトを象徴している(写真 7)。



写真 6 阿波踊りの人形を見る 5 歳児



写真 7 エントランス

年齢ごとの保育室はそれぞれ2階建てでガラス張りのテラス、可動式の屋外テラスがあり、その先に芝生や畑、木々がある広々とした園庭に繋がっている。建築家はペタゴジスタや保育者たちとも話し合いながら建築し、「教育学を体現した建物である」と園のペタゴジスタは語った。各保育室にミニアトリエがあり、透明によって明るい1階で主に活動し、2階はやや暗く、お昼寝の空間として1歳児以上は利用している。戸外へ続く場所にガラス張りのテラスがあり、2本のレールが庭に伸び、可動式の屋根付き空間は特徴である(写真8)。園庭に従来の遊具はなく、垣根で囲い、芝生で、大きな木を西側に植え、木陰を作る。竹林でかくれんぼ、畑、アップダウンもあり、ジャンプや登り降りができる。

4クラスあり、ペタゴジスタと各クラス3名の教師が担当しており、園長はいないと話した、見学した2015年の各クラスの数とプロジェクトは、次のとおりである。

- ・3～10か月児 15名 テーマ：光
- ・11～18か月児 18名 テーマ：色彩(紙)
- ・19～24か月児 21名 テーマ：色(絵具)
- ・25～32か月児 24名 テーマ：自然

保育者によれば、ダンサー(アテルバレット国立舞踊団所属)が園を訪問して一緒に踊る活動やシアターにダンスを観に行く等の交流を行っていたこともある。観察した保育では、昼食前の時間に2歳児クラスが全員輪になって座り、保育者が絵本を床に置き、身体表現しながら絵本を読み語っていた。絵本の主人公の一家が「草をかきわけ、泥を踏みしめ、水をバシャバシャ跳ね返し」という部分では腕でかき分ける動作や大きく脚を踏みしめる動作を



写真8 各保育室から戸外へ続く場所にガラス張りのテラス。2本のレールが庭に伸び、可動の屋根付き空間がある。

行い、「それでも見つかりません」の部分では手を大きく横に振っていた。子どもも一緒に同じように動き、絵本の世界を楽しんでおり、座ったままだが、とても大きなジェスチャーで示す保育者の身体表現性は秀逸であった。

再訪した際、この保育者と再会し、インタビューをした。その結果、この保育者は子どもの動きから、子どもの今の気持ちや思いを読み取っていると語った。小さな棚の中に丸まって入ったり、戸棚の上によじ登ったりするのを、大きな危険がない限り温かく見守るようにし、子どもたちが主体的に動き、周囲と関わるように促すとともに、自分自身積極的に動き、かかわり、体で語るようにしていると、保育者自身が身体でのコミュニケーションを重要視していた。

また、「光と遊ぶ」というテーマで週1回、保育室2階のやや暗い部屋を利用して活動していた。懐中電灯、ライトテーブル、OHP、帯のようなLEDライト、PCとプロジェクターなど、光と影を十分に味わうことができる環境構成である。活動内容を紹介したDVDでは、プロジェクターで抽象的な画像

を投影し、その前を白いマントを着た子どもが通り、映像と共に踊るように動き、マントに映る光を楽しんでいた。また、子どもは壁に映る自分の影に気づき、その影とも遊んでいた。光と影などから感じたままに子どもたちが身体で表現する活動であり、場と身体が対話できるこのような空間は一人一人の身体表現を促す機会になっている。

身体表現は可塑性の芸術であり、形として残らない。映像で記録することにより、活動過程や発表の様子を振り返り、子どもの気づきや表現を理解することができる。

③Scuola dell'infanzia Elisa Lari

エリザ・ラーリ幼児学校

創立 90 周年の歴史ある幼児学校で、レッジョ・エミリア駅から徒歩圏内にあり、FISM（カトリック系学校連盟）に所属し、教区（San Francesco di Paolo）の司祭が校長を務め、保育・教育学を学んだ女性の園長が、運営している。現在、心理学専門家と共同でモーツァルトの音楽を毎朝 5 分間聞かせるというプロジェクトを展開し、集中力が高まり、素早く行動、1 年かかっていたことが短期間で獲得できるようになったと説明された。



写真 9 5 歳児、園庭で日本の文字を書く活動

園は 4 クラス（2 歳児、3 歳児、4 歳児、5 歳児）63 名の構成である。制服があり、芝生の園庭には大型遊具なども配置されており、造形活動なども机やいすを持ち出し、園庭の木陰で行っている（写真 9）。

4 歳児クラスでは「私の目」をテーマにした活動が展示してあった。画用紙に自分の目の部分の写真を貼り、自分で選んだ素材で目が創られており、一人一人の工夫が興味深い（写真 10、11）。



写真 10 4 歳児の「私の目」

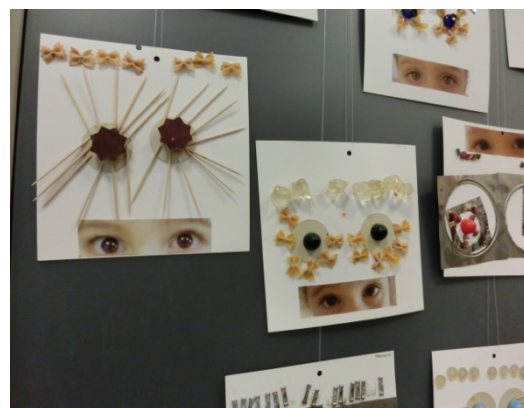


写真 11 多様な廃材を利用した「私の目」

3歳児のクラスでは、「私の鼻」というテーマで、横顔の写真を掲載、そして子どもたちが自分の鼻を発見し、次に様々な草の臭いを嗅いでみたことが展示してあった(写真12)。

ドキュメンテーションは教室の前に置かれ、保護者が手にとって読めるようになっていた。外部講師による週1回の体育指導のドキュメンテーションには、友達と動きを工夫しながら、繋がっていく様子が写真で紹介されていた(写真13、14)。この他にも、フープやパラバルーン、ムーブメントスカーフで自由に体を動かす活動記録があった。園長によれば、体を使って工夫する遊びを大変重視しているとのことである。



写真12 「私の鼻」と題する展示

④ Scuola dell'infanzia Centro Rosa Galeotti ローザ・ガレオッティ幼児学校

レッジョ・エミリア教育を実践していた幼児学校で、自然豊かな郊外にある。子どもの人数が少ないことを理由に一旦廃園になりかけたが、自然豊かな環境を生かした幼児教育を実践できる施設として、市から

委託され、運営が継続している。9月～6月の月曜～金曜に開園し、7:30～9:00登園、15:30～16:00降園する。なお、午前みの保育の子どもは12:30までである。延長保育は7家族以上の希望がある場合、16:00～19:00まで預かっている。園のクラスと人数は次のとおりである。

- * 22か月～36か月、21名
- * 3～4歳、27名
- * 4～5歳、30名
- * アトリエリスタ1名が常駐し、素材を美しく並べ、環境を設定している(写真15)。



写真13 いろいろな体の動かし方



写真14 友達と一緒に動きを工夫する

環境を活かし、エコロジー、環境教育、自然から学ぶことをテーマに取り組んでいるとペタゴジスタは語った。1時間半ほどの見学の間、子どもたちはエントランスにある素材を活用して、「太陽」を創り上げていた(写真 16)。

この園の周囲にはぶどう畑が広がっていることから、ぶどうの育ちや色の変化、臭いを実感し、朽ちていく様子も観察でき、「命の尊さ」を考える機会とし、また、草や土の上を歩き、昆虫も多く、うさぎも飼育しているとのことであった。地域との共生、協働で子どもたちを育ており、農家では乳搾りを体験、散歩にも出かけるそうである。大地からの恵みをいただくことを実感できるように、2名の調理師による地元で採れた野菜などが調理して給食に出される。園庭は自然のまま緑の草で覆われ、木製の遊具が置かれていた(写真 17、18)。

各年齢のプロジェクトは次のとおりである。

【4・5 歳児】

「18 世紀の建物のプロジェクト」: 古い建物までの道標、地図作り、立体での構成。ロジクターで建物を映し出し、その前で積み木で道や牧場なども制作しながら、自分で歩いたり、転がったりしていた。

「アイデンティティ」: 自分の顔の A4 顔写真を水平線を引き、額、目、鼻、口、顎などのパーツに切り分ける。エリザ・ラーリ幼児学校での「私の目」の制作活動に類似していると考えられる。

「かたつむり」: 前日に降った雨の影響で、朝登園してきた子どもが見つけた「かたつむり」を持ってきたことをきっかけに

始まった活動である。「きっと園庭にもかたつむりがいるに違いない」と 5 歳児は探索に出かけ、かたつむりを取ってきた。観察時には 2 名の子どもと実習学生 1 名が庭でルーペ等を持ってかたつむり探しを続けており、4 名の子どもはかたつむりの観察しながら、粘土でかたつむりを作っていた。角に興味を持った子どもには触れさせ、どのようにそれを粘土で表すか、考えるように教師は促していた。

【3~5 歳児】

「変化、変身、進化、植物の一生」キャベツの葉 (少し痛みのある) の観察画

【8 か月~34 か月】

「クモの巣」透明シートにクモの巣を描く



写真 15

子どもたちの長靴も美しく飾られたエントランス



写真 16 子どもたちが作った太陽



写真 17、18 緑豊かな園庭には木の遊具が置いてある

4. まとめ

レッジョ・エミリア市内の保育形態の異なる4園を観察した。永岡、石井(2013: 70-71)によれば、「65園ある幼児学校のうち、市立は25園で、いわゆるレッジョ方式を実践している。残りは、21園がキリスト教の経営、14園が国立で、いずれもレッジョ方式ではない」と述べている。しかし、実際に視察した結果、教会系のエリザ・ラーリ幼児学校のように、クラス単位で活動を行い、日本の幼稚園に似ている園もあるが、その保育内容については保育形態に関わらず、レッジョ教育からの影響は大きいと感じた。

身体表現性について、視察した結果は、図1のようにまとめることができる。

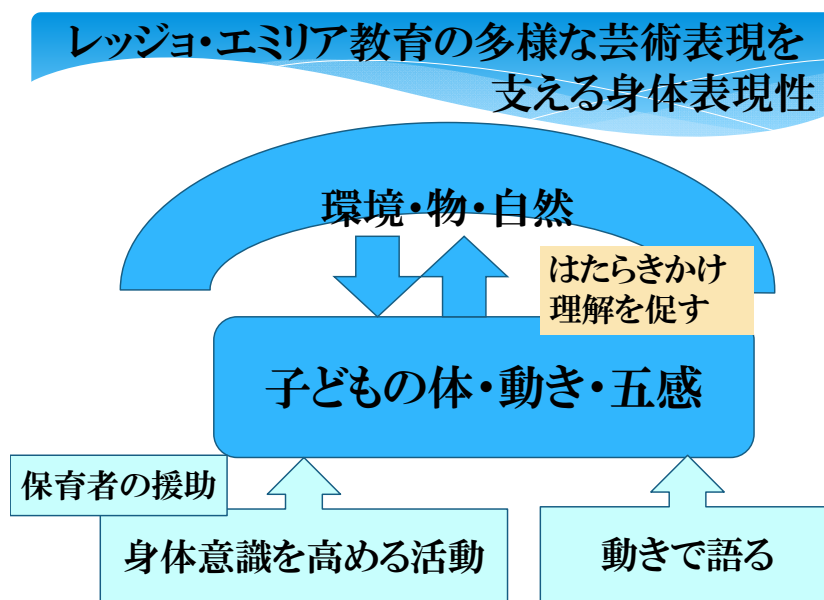


図1 レッジョ・エミリア教育の多様な芸術表現を支える身体表現性

レッジョ・エミリア教育の多くの事例で、芸術教育の一環として、美術、音楽と芸術領域で分けず、多様な芸術表現を支える身体表現性が認められた。子どもたちは五感を通して周囲の事物や自然を感じ、自分の体で、そして動きながら、周囲の環境や自然、物などと関わり、主体的に働き、対象を理解し、それを身体で表現し、さらに、造形表現へとつながっていく。

したがって、感性を刺激するような環境構成の設定によって、子どもたち自身が探究し、自分の表現に出会っていくようである。単に「自由に」ではなく、十分に推敲して子どもたちにどのような環境を整え、そこから子どもたちはどのように学び、どのように自分なりの表現をしていくのか、その可能性を考えることが重要である。環境や物、自然に対し、子どもたちの体で関わり、五感で感じ、事物と共に動くことで理解するよう促していた。特にプロジェクトを利用した光や影を環境構成とし、場と身体が対話できる空間は一人一人の身体表現を促す機会になっている。

こうした探究的な身体の在り方は、どの園でも子どもの身体を基盤とし、五感を通して、物を感じることを繰り返し行うと共に、身体意識を高める活動が認められた。具体的には、自分の身体に目を向け、身体部位を観察して表現することで、身体意識を高めるよう、促していた。また、ダンサーのアトリエスタやダンサーとの交流、体育指導での身体表現なども行われていた。ただし、ダンサーを育成するためのトレーニングではなく、題材や完成させた造形作品、光と影などから感じたままに子どもたちが身体で表現する活動であった。

さらに、保育者たちは動きで子どもとのコミュニケーションをはかり、子どもたちの身体表現を促していた。子どもの動きから子どもを理解し、体の動きで積極的に働きかけ、動きで子どもたちへ語りかけている。

特に観察した保育者の読み聞かせでは、保育者の身体表現によって、絵本の世界に誘い込み、子どもが身体表現しながら、物語を理解できるように促していた。身体表現を伴う読み聞かせのスタイルは日本でも実践できるものであり、子どもと保育者の身体を使った対話といえよう。

また、身体表現は物としては残りにくい点から、創作過程も含め、写真や映像なども利用したドキュメンテーションとして作品を創作過程も含め、残していくことはとても重要である。

以上より、レッジョ・エミリアの幼児教育では、子どもの身体意識を高める活動が広く行われ、保育者たちは動きで子どもとコミュニケーションし、子どもの身体表現を促していた。また、保育者たちは光と影のような感性を刺激する環境を構成し、子どもたちは身体で関わり、五感で感じ、事物と共に動くことで、理解を深めていると結論づける。

注1 ペタゴジスタとは教育主事であり、大学で教育学を専攻し、園の教育の実践と教育研究を行い、教師と保護者、そして地域との連携を図る役割を担っている。

引用・参考文献

AGAC (2005) 「REMIDA Day」 REGGIO CHILDREN srl.

Giulio Ceppi, Michele Zini (1998) 「children, spaces, relations」 REGGIO CHILDREN s.r.l, p.94

永岡都・石井正子(2013) イタリア幼児教育視察レポート、昭和女子大学 初等教育学科紀要、No.872, pp.70-71

佐藤学監修、ワタリウム美術館編 (2011) 「驚くべき学びの世界」、東京カレンダー株式会社 p.14, p.274

佐藤学、森真理・塚田美紀訳 (2001) 「子どもたちの 100 の言葉」 世織書房、p.504

Vea Vecchi (2002) 「Theater Curtain the ring of transformations」 REGGIO CHILDREN

Vea Vecchi and Claudia Giudici (2004) 「CHILDREN, ART, ARTISTS」 MIAs.r.l., Corregio(RE)

謝辞*本研究は JSPS 科研費 JP 15K01525 の助成を受けたものです。

ツアーを企画した子ども教育立国、および石井希代子先生にお礼申し上げます。

A study of physical expression in Reggio Emilia education

Abstract

In Reggio Emilia education, children respect each other and engage in projects that bring out their personalities through creative experiences. Reggio Emilia schools are renowned for having an art studio run by a trained art teacher who closely coordinates art education. However, few studies have examined physical expression at Reggio Emilia schools. Thus, the aim of this study was to ascertain how activities involving physical expression proceed at Reggio Emilia schools. As part of this study, the current author visited 4 kindergartens in the City of Reggio Emilia twice (in 2015 and in 2016). Facilities and activities were observed, and kindergarten directors and childcare workers were interviewed. In many instances, art education was not divided into music and art, and physical expression was adeptly incorporated into art education. Children widely engaged in activities to enhance their body awareness. Childcare workers encouraged children to express themselves physically and they communicated with children through movement. Settings were created where a projector was used to project light and cast shadows. Having a place where one could interact with one's surroundings promoted the physical expression of each child.

Keywords: Reggio Emilia, physical expression, body awareness